

鬼の居る間に粘膜接触　　〜いつもの皆人編〜

ここは出雲荘。

色々あって下宿することになった二浪の青年、佐橋皆人。

彼のセキレイは現在四羽であり、結・草野・松・月海と性格の違う四人は衝突することもあつたが、慎ましくも平和な日々を送っていた。

そんなある日の、何でもない日常に起きた出来事。

佐橋皆人、浪人生です。

今年こそ……と思っていた帰り道、空から結ちゃんという女の子が降ってきて、いつの間にか鵲鴉計画というものに巻き込まれて、気付いたら四人の女の子と同じ部屋で寝起きして暮らしている　　と言つのが今の状態です。

もう勉強はしなくていいんだろっか……と考えるヒマが無いぐらい、毎日忙しくて、

「結！　それは吾が洗うと言つたである！」

「駄目です！　これは結が洗います。月海さんは皆人さんのシャツを洗つたじゃないですか」

「くーも！ 洗うの！」

俺のパンツを引つ張りあつて揉めているのが見えます。

女の子がパンツの取り合いをするのはどうなんだろうか……。これじゃ本当に、勉強どころじゃないと思います。

「あら佐橋さん、そんなに沈みこんで、どうされましたか？」

「あ…… 大家さん。 いや、ちよつと考え事をしてまして……」

目の前には、ここ出雲荘の大家である浅間美哉さんがいた。

この人は怒ると怖いので気を遣っているけど、本当にいい人だ。

バイトがあるのを忘れてて、「ご飯を食べる時間がなくて急いでいた時も、大家さんは「ちゃんと食べないといけませんよ」と言つて、即席でお弁当を作ってくれたりした。

そして何より、四人も女性を連れ込んでいるような俺を、この出雲荘から追い出さないでおいてくれる……。そんな人は普通じゃないと思う。

「あらあら…… 結さんたち、またやっていますね。 うふふつ」

何気ない言葉だけど、本当に迷惑かけてるな俺……という気分になった。

「あの……大家さん、何か手伝えることがありましたら、言ってください」

「鵜鴫計画が進んで無闇に外出できない今、俺にできることはこれぐらいしかない。」

「そうですねえ……お布団のシーツを干しているのですが、取り込むの手伝っていただけますか？ 一人ではなかなか大変な量で……」

「わかりました。それぐらいなら全然大丈夫です」

庭へ出ると、出雲荘の住人全員のシーツが干してあった。

さすがに一人や二人分ではないので、これだけのシーツを取り込むのは女性の手では一苦労だろつ。

俺は早速シーツを物干し竿から下ろしていき、下に置いた洗濯カゴに放り込んでいった。

「うーん……、やっぱりこれだけあると重いなあ……」

すべてのシーツを洗濯カゴに入れ終え、持ち上げてみる。

大量に重なったそれは結構な量があつて、カゴからはみ出た部分は白い山のように積み重なっており、視界を遮られて前が見えなかった。

ドーンッ！

「きゃ……っ」

「おわっすいませっ！」

フラフラと足元が定まらず、大家さんにぶつかってしまった。  
やばい！と思う瞬間、俺はそのまま倒れこんだ。

「うーん……」

「ん……、んん……」

シートが大量にあったのが幸いしたのか、クッションになったようで大したダメージはないようだ。どこも痛くない。

いや、俺はどうでもいい。大家さんは大丈夫かと心配になり、目を開けてみる。

……大家さんは無事どころか、俺の身体と密着する状態になっていた。

しかも信じられないことに、目の前に顔があつて、さらに唇が俺のものと重なっていた。これって、粘膜接しよ……

「う……っ、おわぁあっ！ す、すいませ！ すいません大家さん！ 決して悪気はなくて！」

「あ……、あつ！ あなた、なんて事……を……っつ……っ！」

目の前で起こった出来事に気付いた大家さんは、唇を手で拭った。汚いものを払うかのよう、何度も何度も指で拭いさる仕草をしていた。

「信じられない……！ 駄目、駄目です……、絶対駄目！」

「ごしごし、ごしごしと、そんなに触れたのは嫌だったのか……と、見ていてちょっと傷つくぐらい必死に拭いていたけど、これはしょうがない、どう見てもこっちが悪い。」

俺は許してもらえない気がしなかったけど、謝ることにした。

「ごめんなさい大家さん！ 本当にすいませんでしたっ！」

「あ……っ、ああ……ッ、ああんんんんッっ！」

「へっ？」

頭をおもいきり下げて謝ったと同時に聞こえたのは、大家さんのあえぎ声だった。

顔を赤く上気させ、ピクンと体が震えたかと思うと、背中の首元が輝き始め、光の羽が一瞬にしてバツと開いた。

「う……、羽化……？ まさか……っ！」

「ああ……、んん……。ふぁ……。ああ……。んっ……」

大家さんの背中からは、確かに結ちゃんたちが羽化した時と同じ、光の羽がキラキラと輝いていた。

大家さんはセキレイだったのか！という衝撃と、自分は何て事をしてしまったんだ！という現実が同時に襲い掛かる。

目の前にはいつもの般若が浮かぶような大家さんではなく、頬を桜色に染めた、やわらかい物腰の、大人の色気を漂わせた女性がいた。

「ふふ…… 羽化、してしまいました。 ふつつか者ですが、よろしく願いますね、佐橋さん」

いや……、本気でシャレにならない……。

それに、さっきおもしろい唇を手で拭いて拒絶してたのに、いきなり催眠術にでもかかったみたいな態度の変化。別人みたいだ。

目まぐるしい展開に俺はわけが分からなかったが、目の前で微笑む大家さんはすごく綺麗で、自分が知っているどのセキレイにもない魅力が……、悩ましげな大人の色気というものが伝わってきた。

「幾久しく…… んん……、ちゅっ」

セキレイとして葦牙に尽くすセリフを言うと、再び俺に唇を重ね、光の羽を輝かせた。もはや何がなんだか……俺は頭の整理がつかない状況で、固まったまま動けなかった。

大家さんが羽化してしまった！

びびどどじよひ……。。

「美哉とセキレイ」

「佐橋さん……はい、あ〜んっ」

ええ……と、今は朝の食事の時間です。

いつもの居間で、みんなそろってご飯を食べているんですけど、俺の隣にはいつもの指定席として、くーちゃんがいるのはいいとして、反対側には結ちゃんでも月海でもなく、なぜか大家さんが座っています。

それで笑顔の大家さんが今まさに、料理を俺の口へと運ぼうとしています。

「……大家さま？」

「……大家どの……？」

「美哉たん……??？」

「みーちゃん？」

結ちゃんを始めとする俺のセキレイたちはすごく呆然とした表情でその光景を見ていた。松さんなんかは、何のギャグ？といった顔で見ている。そりゃそつだ。

確かにおかしい。

いつもなら結ちゃんが、「皆人さん、あ〜ん」と俺の口元へおかずを運ぼうとして、それを見た月海が、「結!」と止めようとする中で、くーちゃんがさりげなく俺の口へおかずを放り込むのを見て、大家さんが「あらあら」と笑っているところだ。でも今は、となりで「あーん」をしているのは、大家さん本人なのだ。

あまりの不自然さに、場の空気は何とも表現しがたいものになった。「どっしました? 朝ご飯はちゃんと食べないと、いけませんよ?」  
ぱくっ

思わず口を開けてしまったところへ、大家さんの箸が口へと運ばれた。なんとというか、いつもの大家さんなら、今の口調の時には後ろに般若が見えたと思っただけで、般若が出てこなかった。

出ないというより、お花畑だ。

お花畑が、大家さんの背後から溢れ出ている。

ホワホワとした雰囲気、和やかなムード。やさしい人妻……

俺の頭は、朝からどうにかなくなってしまったのかもしれない……………。  
「ほら、冷めない内に。たくさん召し上がってください」

口元に運ばれる食材を次々に食べ、朝ごはんを終了した。

食卓に座るみんなは、やはり可笑しすぎる大家さんの様子を不自然に感じていたようで、無言のまま俺とのやり取りを見ていた。月海なんかは、ずっとプルプル震えてた。

大家さんも……もう少し考えてくれたらいいのになぁ……。

いつも以上に変な汗が吹き出るような、緊張感あふれる食卓だった……。

これは疲れた……。

「ミナト、どついう事じゃ？」

食事が終わり、部屋でのんびりしていたところへ月海が入ってきた。

「大家どのに一体何があったのじゃ？ あの変わり様は……。」

月海も、やっぱりおかしいと思っただみだ。そりゃそうだ。

「もしや汝、何かしたのか？」

ドクンッ

これは、どうすればいいのか。

大家さんが羽化したことを正直に話したら、月海はどんな反応をするんだろうか。

きつと、「汝は何を考えておるのじゃー！」と言って、水でお祝いされるに違いない。

少なくとも、結ちゃんたちに対抗意識を燃やしている月海にとっては、これ以上セキレイが増えることは、面白く思わないことだろう。

「お、俺は何もしてないよ。 たぶん、大家さんの気まぐれじゃないかな？  
ほら、天気がよくて機嫌がいいとか……」

苦しい言い訳だった。

「……ふむ……確かに、大家殿はおかしかったが、そうかもしれんの……」  
納得してくれた……

月海はチラチラと俺の顔を見てるけど、大丈夫だろう……、うん。

「ミナト、もしなんぞ……隠し事をしていようものなら……」

「してないっ！ 何も……っしてないよ！」

何かに感づいたのか、怒りの感情を表現するように、月海の周りを水がうねりだした。

俺が即答すると、「ならばよい」と、微妙な表情を浮かべつつ、月海は部屋から出ていった。危なかった……。大家さん……隠すつもりはないのかな。

みんなに嘘をつくのも嫌だし……。

これじゃ近い内に絶対ばれて、俺は終わってしまいます。

(体験版はここまでになります)

見てくださり、本当にありがとうございました。  
よろしければ、製品版もよろしくお願いいたします。